

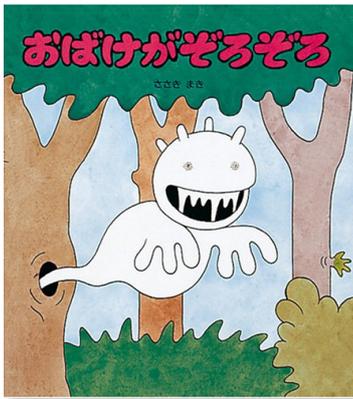
Book List ～沖芸の先生による、今読むべきこの15冊～ Vol.9

表現することの楽しさを 教えてくれた絵本たち

選者：長尾 恵那

彫刻家、沖縄県立芸術大学 美術工芸学部美術学科 彫刻専攻講師

県立芸大の先生が
選ぶおすすめ本!



『おばけがぞろぞろ』作・絵：ささき まき

福音館書店、1994年

J/E/オ/

「おびるべちゃん」や「うめもらくん」など、これまで耳にしたことのない名前のおばけが次々と登場します。名前だけでなくその容姿もみんな摩訶不思議。これといった事件は起こらず、ただおばけたちが集まってくるだけのお話ですが、そのユニークな造形やネーミングセンスの斬新さは今読んでも全く色褪せません。作者の佐々木マキさんは1960年代に雑誌『ガロ』で発表していたマンガ家でもあります。表紙にあるおばけの点描で描かれた目は、戦後にナンセンスギャグ漫画家として活躍した杉浦茂の作品にも見受けられることを大人になってから知りました。他のおばけたちにもルーツがあるのか、とても気になります。

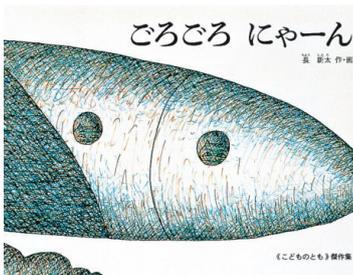


『やこうれっしゃ』作・絵：西村 繁男

福音館書店、1983年

J/E/ヤ/

ある家族が夜行列車に乗って過ごす一晩が周りの乗客の様子と共に生き活きと描かれています。西村さんの丁寧でやさしいタッチの絵は味わい深く、絵を描くことの喜びが伝わってきます。横長に開かれた画面は車内の様子を観察するのにぴったりで、端から端まで細かく描き込まれているため、ページを歩き来しながら読んでみると「あ！あの人はここでこんなことしてる」と、乗客それぞれのドラマを想像することができます。旅のロマンであり醍醐味でもある一期一会が、この絵本には盛り込まれているのです。現在の日本では貴重な存在になった夜行列車ですが、私の中で未だに憧れが消えないのはこの絵本の影響でしょう。

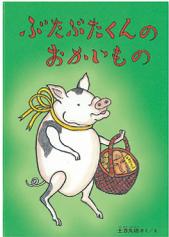


『ごろごろにゃーん』作・絵：長 新太

福音館書店、1984年

J/E/ゴ/

最初から最後まで、登場することばは「ごろごろにゃーん」だけ！猫たちが乗り込んだ飛行機を見守りながら「ごろごろにゃーん、ごろごろにゃーん」と頭の中で繰り返すうちにリズムが生まれ、催眠術をかけられたように手は淡々とページをめくります。荒々しいタッチの線をびっしりと重ねて描かれた絵は狂気じみている、しかもよく見るとそれらの線はなぜか水色と黄色という組み合わせ。どうりで画面全体がチカチカしているわけです。もはや異次元世界。「こんな絵本あっていいの？いや、これこそが絵本の面白さだ！」と個人的には思っていますが、みなさんはどのように感じるでしょうか？



『ふたぶたくんのおかいもの』

作・絵：土方久功

福音館書店、1985年

一見簡素な絵に見えますが、ふたぶたくんの背景をよく見ると、最後に付いている地図としっかり整合性がとられていて、不思議なこだわりを感じます。作者が彫刻家であり民俗学者でもあることから、作品全体にプリミティブアートの匂いが感じられます。

J/E/ブ/



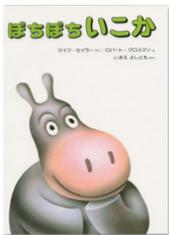
『いたずらララちゃん』

作：なかえよしを 絵：上野紀子

ホブラ社、1986年

意地悪な女の子が主人公という絵本は珍しいのではないのでしょうか。心の中で企んでも実行するには気が引ける、そんないたずらを思いつきりやっつけてのけます。シニカルなお話もさることながら、ダリの絵画のような世界が登場するなど、絵本全体にシュールな雰囲気も漂っています。

J/E/A/



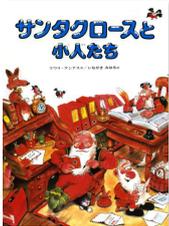
『ぼちぼちいこか』

作：マイク・セイラー 絵：ロバート・グロスマン
訳者：今江祥智

偕成社、1980年

いろんなことに挑戦するもうまくいかないかばくんのお話。訳を手掛けた今江祥智さんの粋な計らいによって、すべて関西弁で綴られています。関西弁イントネーションのおかげで作品全体に軽快な雰囲気が漂い、かばくんの毎度のオチが余計に面白く感じられます。

J/E/ホ/



『サンタクロースと小人たち』

作・絵：マウリ・クナナス
訳者：稲垣美晴

偕成社、1982年

サンタ村にはさまざまな職種があって、おもちゃを作るために木工の機械を操作している小人や釘を打って組み立てている小人、スプレーガンを使って塗装している小人もいます。それぞれの専門分野で自分の能力を発揮する職人たちが、サンタを支えているのです。

J/E/サ/



『まほうのしゃぼんだま』

作・絵：マーサー・メイヤー

福音館書店、1979年

とても小さな絵本です。文章は無く、緻密で温かいタッチの絵だけで語られていますが、お話は意外とスリリング！夢くも時として強靱なしゃぼんだまの描き分けにもぜひご注目ください。子供の頃は最後のオチが大好きでした。

J/E/マ/



『だいちゃんとうみ』

作・絵：太田大八

福音館書店、1992年

まるでスクリーンに映し出された映画を見ているかのような迫力ある画面構成が大変美しい絵本です。画面の外では、お話に登場した道具や生き物の詳細がその都度添えられていて、より臨場感を増しています。海で遊んだ日の程よい疲労感すら感じられる優れた作品です。

J/E/タ/



『14ひきのひっこし』

作・絵：いわむら かずお

童心社、1983年

小さなねずみたちの視点で大自然を観察することによって、普段とは全く違ったスケール感を味わうことができる絵本です。14ひきそれぞれの個性を見比べるのも楽しいですが、この「ひっこし」編では旅と家の建築が行われるので、冒険要素が多くて大好きでした。

J/E/ジ/



『ぼくのともだち おつきさま』

作・絵：アンドレ・ダーハン
訳者：きたやま ようこ

講談社、1999年

私が子供の頃に読んだ当時は“文字のない絵本”として出版されていました。おつきさまと主人公の優しい交流が描かれており、読む人によって様々な台詞を紡ぐことができます。ページによって少しずつ異なるタッチにはライブ感があり、作品に鮮度を与えていると思います。

J/E/ホ/



『とこちゃんはどこ』

作：松岡 享子 絵：加古 里子

福音館書店、1970年

最近では一般的になった絵さがし遊び絵本ですが、とこちゃんが描かれたのは1970年。市場やお祭り、子供たちの遊ぶ様子など、今とは違うところがたくさんあります。読む人の世代によっては、とこちゃんを探すよりも、懐かしい昭和の要素を探す方が面白いかもしれません。

J/E/ト/



『おふろやさんぶくぶく』

作・絵：さの てつじ

ホブラ社、1991年

この絵本は文章が出てこない代わりにほぼ擬態語・擬声語で綴られています。それでもちゃんとお話は進み、時には笑いを誘いつつ、隅々まで丁寧に描かれた風景描写から、読み終わった後はまるで実際におふろやさんに行ったかのような心地よさが残ります。

J/E/オ/



『とんとんみーときじむなー』

作・絵：田島 征彦

童心社、1987年

「じごくのそうべえ」で有名な田島さんは沖縄をテーマにした作品も数多く手掛けています。この作品は特に鮮やかな色彩と大胆な構図が素晴らしいですが、やはり原画である型染絵を見てみたいくなります。とんとんみーを知らない人はぜひこの機会に調べてみてください。

JK/909/TA26/



『風が吹くとき』

作・絵：レイモンド・ブリッグズ
訳者：小林 忠夫

篠崎書林、1982年

2019年公開の映画「エセルとアーネスト」は原作者の原作に基づいて制作されていますが、内容は映画の方が詳細に語られており、本作に登場する老夫婦は作者の両親がモデルになっていることが分かります。二人が若い頃の時代背景とそれぞれの価値観が描かれていますので、併せて鑑賞することをお勧めします。

J/E/カ/